

十月 月を過ぎると草刈り草取りの仕事はめっきり減って、のんびり年の瀬と決め込んでいたら、掃除の仕事がポンポンと入ってきた。そういうものか。片づけて年を越したいが手伝ってもらわないとできないという人は当然いるだろう。

瀟洒なマンションの独居老人から依頼があった。エントランスでインタホン越しに名乗る、自動ドアのロックが解除されてエレベーターに乗る、という十年に一度あるかないかの手順を踏んで訪れると、迎えてくれたのは半身に軽度の麻痺のある女性だった。室内はきれいに片付いており、掃除も行き届いていた。これ以上何をすることがあるのかと思えたが、頼まれたのは不要になったテレビ台の搬出と家具のわずかな移動だった。どれも中がきれいに空にしてあり、軽いものだった。拍子抜けするほど簡単な仕事だった。女性が自分のできることをぎりぎりまでしたのは明白だった。でも、人にはどうしても両手でできないことがあって、それだけはお願ひすることにした、ということなのだ。この女性の矜持と他者を持つ諦念の境界がくつきり見えるようだった。依頼者の口から「迷惑かけて」などという言葉がこぼれ出ないよう、ビジネスに徹することにする。

何をしてほしいのか今ひとつ要領を得ない。どこから手を付けていいのかわからないということ、どこに手を付けても片付き始めるということ、やり甲斐がぎゅうと詰まっている。一人では手に負えそうになく二人で応援に入った。相手の女性は、「久しぶりの仕事です」とうれしそうだった。年末の応援に応じる人がなかなか見つからず、古いリストをひっぱり出した。コーデイネーターから電話が入ったのだった。

「六年ほど介護をしました。それまで毎日ヘルパーさんや看護師さんたちと関わっていたのが、義父を送ってしまおうとパタツとそれがなくなつて、まったく社会との関わりが無くなつてしまいました。」

ひきこもつたままではいけないこともどうしたらよいかも分かつており、家族の勧めももつともなことばかりなのにずつと動けなかった。たまたま空気を吸いに浮き上がったときの電話だったか。

ぼくが見なかつたこととして先送りしていたトイレも彼女はさつきときれいにしていた。ゴミ入れから溢れかえつたペーパーの芯もすつかりなくなつており、「何とも思いません」と笑つた。ぼくがトイレ掃除すると、亡父は「申し訳ないやな」と言うのが常だった。あれは、あれこれ思い、笑いもしなかつた不孝者が言わせていたのだった。



専業ババ奮闘記 (その2)128

## 木幡智恵美

迫りくるコロナ (3)

寛大の学年閉鎖、実歩のクラスの閉鎖と続き、県内のコロナ感染者数は百人を下回る日もあれば、超える日もある中、三回目のワクチン接種日がやってきた。二回目に発熱と倦怠感があつたことを話すと、問診をしてくれた医師が、「お気の毒ですが」を二度も繰り返し、「同じような症状が出るでしょう。でも、一日半以内に収まりますから」と言われた。

接種した次の日の朝、今回は大丈夫かなという感じだったのが、脚の関節の痛みから始まり、熱も出だした。前回ほどではないものの、三十八度まで上がり、やはりだるくて、二回目同様、トイレに立つた際に用事をし、また横になるという一日を過ごした。数日後、寛大と実歩がワクチン接種を受けたとのことだが、二人とも、熱が出たりだるかつたりといった症状は出なかつたようだ。

学校は春休みに入り、感染者がまた増えだした。四月一日が百六十三人、次の日が百五十二人と、一月の大寒前後頃(二十一日)に百九十一人と並みに増えてきている。

寛大は、平日は児童クラブ、土曜日のうちで預かるということで、二日には夫が玉湯に迎えに行つた。気温は低いけど好天だったので近くの公園まで遊びに行く。元気なもので、寛大は上着なしでバッタの遊具に乗ったり、滑り台をしたり。私は寒くてたまらないので、寛大の近くを歩き回っていた。帰りに、「ババ、ヨモギ採って、ヨモギパンを作ろうよ」と言うので、犬のオシッコがかかっているような高いところを探してヨモギを摘んだ。帰ってから、寛大をジジに預け、ヨモギの始末をし、ほかの材料と一緒にパン焼き機にセット、それから昼食の準備にかかる。陽の当たる仏間に運び、暖かな部屋でお昼ご飯を食べた。

春休み中、何度か歩いて寛大を児童クラブまで送り、休み最後の土曜日は玉湯に行つた。この日は夏日に近い好天で、寛大は自転車練習を兼ね、近くの公園に行く。実歩はお母さんとケンパ、宗矢は私と「もういいかい」とかくれんぼもどき。途中クモを見つけ、家に帰つてからも、「クモがおつたがあ」を繰り返した。普通に会話ができるようになってきている。

この日の感染者数は百五十二人。週が明けると新学期が始まる。感染の爆発がおきやしないか心配だ。

30代フリーター 政府は敵基地攻撃能力の保有を明記した「国家安全保障戦略」など安保関連3文書を閣議決定した。保有の理由として、相手に攻撃を思いとどまらせる「抑止力」の向上をあげている。

年金生活者 「相手に思いとどまらせない攻撃」としてどんな攻撃が想定されるのか。それを推測すると、すべてアメリカが戦争する場合に行き着く。

なぜいまの日本に「抑止力」の向上が必要なのか。「政府は、ロシアのウクライナ侵攻や北朝鮮の核・ミサイル開発、中国の軍備増強により、日本を取り巻く安全保障環境が厳しさを増している、防衛力を強める必要があると説く」（12月14日朝日新聞朝刊「いちちらかわかる！」）

ロシアが日本を攻撃する可能性があるのは、アメリカと戦争になったときくらいしか想定できない。そのときは在日米軍基地にミサイルを撃ち込む可能性がある。だが、そんな戦争はアメリカの同盟国がロシアか

ら攻撃を受けた場合しか考えられない。ロシアはウクライナを攻撃する意思や能力は持つていても、NATOや日本を攻撃する意思や能力は持ち合わせていないので、そうした想定は架空に近い。

北朝鮮が日本をミサイル攻撃する場合も、アメリカと戦争になったときしか考えられない。その場合はやはり在日米軍基地などを狙う可能性がある。

けれど北朝鮮の軍事的な振る舞いの履歴を振り返ると、自らアメリカに手出しする可能性はゼロに等しいから、米朝戦争が起きるとしたら、アメリカのほうが体制転覆をはかる作戦を開始したときくらいだろう。ロシアに手こずる今のアメリカはそれぞれではないはずだ。

30代 中国が台湾の武力統一に踏み切ったときは日本も否応なく戦争に巻き込まれる可能性があると言われていた。

年金 それもアメリカが武力介入した場合に限られる。その作戦に使われる

在日米軍基地を叩く必要を中国は感じるだろう。その判断は日本の敵基地攻撃能力の有無とは関係なしになされるだろう。そもそも台湾侵攻そのものが、アメリカの敵基地攻撃能力を織り込んだうえで開始されるはずだ。

以上を考えると、敵基地攻撃能力は日本の抑止力の向上のためという政府の説明はリアリティーが乏しいことがわかる。ただし、アメリカにとつては、アフガニスタン、イラクでの戦争のあと戦争遂行能力が著しく低下したことで生じた抑止力のすき間を埋めることができるし、日本にミサイルを買わせて自国の軍需産業を潤わせることができる実利がある。

30代 憲法9条にもとづく「専守防衛」からの逸脱が懸念されている。

年金 専守防衛がなくなり出てきた、目に見えない非物理的な抑止力を低下させるばかりではない。大量の武器弾薬を買い込んで、それを使う自衛隊員の確保には少子化の厚い壁が立ち上がる。

世界の大学や研究機関の研究グループが参加して実施している「世界価値観調査」によると、「もし戦争が起こったら国のために戦うか」との問いへの回答で日本は「はい」が13・2%

と、調査対象79カ国中最低だ。一方、昨春の朝日新聞の世論調査では、自衛隊は憲法に「違反していない」が78%にのぼる。つまり、もし戦争になったら、自分は戦わないけれど、自衛隊が戦うのは支持すると考えている国民が最も多いということだ。しかし、その自衛隊がいま定員割れしていて、少子化がさらに進めばだれが戦車に乗るんだといった指摘もある（永江一石「自民党の防衛力強化論は全くの空論」）

そんな国が武張ったところで手にできる抑止力は知れている。抑止力は「戦う気」がないと抑止力たり得ないからだ。これに対し、「戦う気」のなさを武力の抑制によって表明する専守防衛は目に見えない抑止力を生む。赤ん坊に危害を加える者はまれにしかないように。

30代 朝日新聞の世論調査（12月17、18日）では、敵基地攻撃能力の保有に「賛成」は56%と過半数におよんでいる。

年金 防衛費増額のための増税に「反対」が66%、国債発行に「反対」が67%にのぼる。つまり国民は事実上、軍備の増強を拒んでいると見ることができ

る。このようなメンタリティーは、日本

ニュース日記 860  
中村 礼治

## 敵基地攻撃能力に抑止力はあるか

もそのひとつであるはずの国民国家の理念から逸脱している。国家は王や皇帝のものではなく、国民のものであり、だから国家は国民が自らの手で守るという前提に立っているのが国民国家だ。それは西欧で市民革命によって誕生した国家の形態であり、日本国民に同種の経験はない。戦後、アメリカに国民国家の体裁だけを与えられ、そのことが戦争観にも反映している。

日本人は少なくとも近代的な意味での戦争を嫌っているように見える。明治維新後に何回も戦争をしたのは、それらがいづれも天皇のための戦争、いわば古代的な戦争だったからだ。それでも国民を総動員する第2次世界大戦を戦うことができたのは、国民と天皇との間の距離が一面では遠いように見えて、他面では密着するほど近いからだと考えられる。

そう考えると、日本国民がいざとなったら戦争をする覚悟を持つようになる可能性は極めて薄いと言わなければならない。